

「会う」VS.「逢う」： 漢字から受けるイメージと使い分け

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 千佳 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23514

「会う」VS.「逢う」

—漢字から受けるイメージと使い分け—

社会言語学演習 4年 加藤 千佳

<要旨>

一般に、「会う」「逢う」のような、同じ訓読みであるのに表記の仕方が異なる異字同訓語は、厳密な意味の違いはないとされる(金田一他、1995)。しかし、実際には何らかの基準に基づいて使い分けがされているようだ。本稿では、「会う」「逢う」、「寂しい」「淋しい」、「恐い」「怖い」という3種類の異字同訓語ペアについて、3つの異なる方法に基づき、使用傾向の違いを明らかにする。

<目次>

1. はじめに
 - 1.1 漢字に対する疑問
 - 1.2 気になることばと分析方法
 - 1.3 漢字から受けるイメージ
 - 1.4 本稿の構成
 2. 3つの分析と結果
 - 2.1 辞書による調査
 - 2.2 歌詞カードによる調査
 - 2.3 学生対象の意識調査
 3. 考察と展望
 4. おわりに
- 注釈
参考文献
参考資料
意識調査票添付

1. はじめに

1.1 漢字に対する疑問

異字同訓語(あるいは異字同音語)の例に、「聞く」と「聴く」や「食料」と「食糧」がある。例えば、毎日新聞社には『毎日新聞用語集』というものがあり、そこにはこういった漢字の使い分けの基準と用例が掲載されているようだ。¹⁾これによると「聞く」は一般用語、「聴く」は特殊用語・身を入れてキクで、キク態度によって使い分けるが、どちらでもよい時はなるべく「聞く」を使うと解説されているらしい。このことから見ても、明らかな違いがない場合は使う人のイメージで判断されているようだ。個人的には、「キク」に関しては、英語の「hear」が「聞く」で、「listen」が「聴く」というように、それぞれ「耳に入ってくる」ものと「意識的に耳に入れる」ものとして使い分けているが、ここにある「どちらでもよい時」というのはどんな時なのか。大変わかりづらい。さらに「食リョウ」に関しては、食物が「食料」で主食が「食糧」なのだそう。食リョウ援助の際には援助物資にどちらの割合が多いかで分けるらしい。意外にもこういったことばが多く、記事を書く人も苦勞しているようだ。

同様に、以前から音楽CDに添付されている歌詞カードにちょっとした疑問を感じていた。それはことばの使い方に対してである。例えば「会う」と「逢う」のような、同じ意味にもかかわらず、異なる漢字が使われていること、「理由」を「リユウ」ではなく「ワケ」とルビ(読み仮名)をふる当て字などである。後者の場合は、そのことばの持つ意味合いを視覚と聴覚の両面から明確にするため、あるいはメロディーとの関係(字数制限)があるためだと考えられる。では、前者はどのような理由があって使い分けられているのだ

ろうか。また、使われる漢字の意味に違いはあるのだろうか。これが本稿で扱う問題点である。

1.2 気になることばと分析方法

本稿では特に私が気になっていた3つの異字同訓語、「会う」「逢う」、「寂しい」「淋しい」、「怖い」「怖い」について調査する。ただし、「コワイ」は歌詞カードにあまり使用されていないため、2つの資料のみを利用する。具体的には、①基本的な意味の違いを明らかにするための辞書、②実際の用例として歌詞カード、③使い分けの傾向とイメージの接点を探るための学生を対象とした意識調査、という3つの資料を利用する。

1.3 漢字から受けるイメージ

疑問に思った1つである当て字は、最近になって多く使われるようになったように思われる。この当て字が視覚・聴覚の両面により、特定の意味合いを持たせる、つまりイメージを膨らませるものであるのなら、異字同訓語の使い分けにも、漢字の形態が持つイメージと関係があると仮定できる。

個人的には、「逢う」は恋愛感情を持った異性に対して使い、それ以外は「会う」であると捉えている。「サビしい」に関しては「淋しい」を「サミしい」、「寂しい」を「サビしい」と読み、意味も違うのではないかと考えた。「コワイ」については特に使い分けはなく、意味の違いはほとんど見つからないのではないだろうか。こうした仮説に基づいて調査をすすめ、違いを明らかにしていきたい。

1.4 本稿の構成

本稿は大きく3つに分けられる。まず、3つの

方法による分析とその結果を数値と図とともに示す。次に、それらの結果に基づいて考察し、展望を述べる。最後に、この調査にあたっての反省に触れる。

2. 3つの分析と結果

2.1 辞書による調査

辞書では、一般的に考えられている意味を参考にしたい。まず「アウ」であるが、国語辞典を調べても異字同訓語は同一箇所に表示されており、特に違いはなかった(梅棹他、1989)。しかし、本稿作成の際、使用したワープロの辞書での表示が異なっていたので少し説明しておきたい(マイクロソフト版、1998)。これによると「会う」は「人とあう」時に使われ、「別れる」と対義になったものであり、「逢う」は「めぐりあう」という意味合いを持つというように表示されていた。「サビしい」については、どちらの漢字も「サビしい・サミしい」と読むらしいことがわかった。意味は「本来あるべき状態になく満たされない気持ち、人の気配がなく心細い」で違いは見られなかった。さらに、「コワイ」に関しても同じ意味を持つと記載されていた。

これらの結果から見ても、3つの異字同訓語について、基本的な意味にほとんど違いはないと言えるだろう。ではなぜ使い分けがされるのか。そこで今度はその漢字が本来持つ意味を調べるため、漢和辞典を利用した(藤堂、1985)。これにより大きな違いがわかったのである。1つは「意味」の違い、そしてもう1つは「訓読み」の違いである。

まず「アウ」では、「^{カイ}会」は「集まり。また、出あい」と意味され、解字²⁾では「多くの人が寄り集まって話をする」とされていた。「^{オウ}逢」は解字で「両方から近づいて一点で出あう。

ばったりと思いがけなく出あう」とされている。これによりはっきりとした意味の違いが見てとれる。

次に「サビしい」では、「^{シツ}寂」は「音がしない。ひっそりとしてさびしい」という意味を持ち、解字では「家の中の人声が細く小さくなったさまを示す」とある。これに対し「^{リン}淋」は「水が絶えずたれる。また、そのさま」で、解字も同じようなものであった。ここから、「寂」と「淋」がもとはまったく違う意味を持った漢字であることが明らかになるとともに、「淋」は「さびしい」という意味自体持っていないことがわかった。さらに、「淋」は訓読みで「サビしい」という読みが記載されず、「したたる」「そそぐ」という読みが記載されていた。しかし、ワープロで「サビしい」で変換すると「淋」の文字は出るが、逆に後者2つの読みで「淋」の文字は出てこない。また、「寂」の訓読みの表記も「サビしい」だけで、「サミしい」とは出ていなかった。

続いて調べた「コワイ」は、「^{キウ}恐」が「おどす。こわがらせる。こわがる。また、そうなりはしないかと心配する」で、解字は「心の中が突き抜けて、穴のあいたようなうつろな感じがすること」であった。また、「^{フシ}怖」は「びくびくと心配する。ひやひやする」で、解字は「何かに迫られた感じでおびえること」とあった。これだけ見ると違いはないように感じられるが、先ほどの「淋」と同様、「恐」に「コワイ」という読み方はないのである。「おそろしい」という読みで、意味として「こわい」ということばがあるのだ。しかし、これもワープロでは「コワイ」で変換される。後述する意識調査の中でも、「コワイ」という読みに関して疑問の声は出なかった。実際の読み方とは違うものの、意味のイメージが強すぎてそうとらえられるようになった結果なのだろうか。

漢字本来の意味については、上記のような違いを見ることができたが、実際にどのように使い分

けがされているのか。次はその傾向を歌詞カードで調査していきたい。

2.2 歌詞カードによる調査

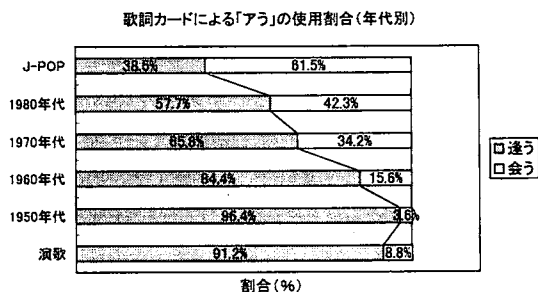
2つめの方法として取りあげたのが歌詞カードである。ここでは、歌詞によく使われる「会う」「逢う」と「寂しい」「淋しい」について、漢字の使い分けがなされていると仮定し、歌の年代と何らかの相関関係がありうるのかどうかという問題を調べてみることにした。年代は1950年代、60年代、70年代、80年代のそれぞれのヒット曲と、50年代以前から続いている演歌³⁾、それに90年代の代表と言えるJ-POP⁴⁾に分けた。50年代から90年代のヒット曲では演歌を除いたもの⁵⁾を集めて統計を取ることにし、計356曲(演歌51曲、J-POP111曲、50年代39曲、60年代64曲、70年代61曲、80年代30曲)の歌詞を利用した。

まずは演歌であるが、ここではある程度予測していた通り、「アウ」については、「逢う」が91.2% (31/34) と圧倒的によく使われていた。また、「淋」は「サミしい」、「寂」は「サビしい」と読まれる割合が多く、使用頻度では「淋」が70.6% (12/17) と多かった。ほかのジャンルと違い、「サビしい」ということばが多く使われているのも演歌ならではの傾向であった。

続いて1950年代から80年代までであるが、「サビしい」では50・60年代ともに「淋」のみが使われ、70・80年代でも「寂」より多く使用されていた。80年代の特徴として、ヒット曲から見てもアイドル全盛期であったことがあげられる。この時代には、松田聖子や近藤真彦などのアイドルが多く活躍し、詞の内容も明るく活発なものが多い。「サビしい」という悲しさが伴うことばが、ほかの年代よりも使用頻度が低いのはこのためであると考えられる。

さらに「アウ」の使用頻度を、年代順に「逢

う」：「会う」の割合で表したいと思う。50年代では96.4%：3.6%、60年代では84.4%：15.6%、70年代では65.8%：34.2%、80年代では57.7%：42.3%と、徐々に「会う」の使用が増えているのが分かる。また、演歌が91.2%：8.8%であるのに対し、J-POPでは38.5%：61.5%と大きく差が見られた。個人的には、以前から使われていたのが「会う」で、最近になって「逢う」が使われるようになったと仮定していたので、これは新しい発見である。ここで以下にグラフに表してみた。



これまでの調査で使用割合はわかったが、同じ作詞者の詞を集めたわけではないので、作詞者による使い分けは見られなかった。そこでJ-POPでは歌手・作詞者が同じであることをふまえ、歌手の性差をも対象として傾向を調べた。ここでは「寂しい」や「淋しい」があまり使われておらず、男性による詞でどちらも「サミしい」と読むこと以外に特に使い分けの傾向は見られなかった。さらに「アウ」では、①作詞者・歌手が女性、②作詞者・歌手が男性、③作詞者が男性・歌手が女性、という3つに分類してみると、作詞者が女性・歌手が男性という構成はほとんどないためここでは考えないことにした。この結果、具体的な使用割合としては、①の場合、「逢う」が37.5%、「会う」が62.5%、②では「逢う」が42.2%、「会う」が57.8%で、③では「逢う」が35%、「会う」が65%であった。数値では性別による明確な違いはないように思えるが、

実際には大きく異なる傾向を見ることができたのである。男性作詞者の場合、どちらか一方の漢字だけを使うか、使い分けずにどちらも使う傾向があり、女性作詞者に多かったのが、好きな人（異性）に対しては「逢う」、それ以外は「会う」、単に「アウ」なら「会う」、「めぐりアウ・デアウ」のみ「逢う」という漢字の使い分けである。さらに、作詞者が男性・歌手が女性の場合、女性作詞者と同様に相手による使い分けがあったり、男性作詞者のように使い分けがなかったりと様々であったが、特別な使い分けも見られた。それは、タイトルで「アウ」ということばがある場合のみ「逢う」が使われている⁶⁾ことである。こうした結果から次のように推察できる。

ここで使用したJ-POP111枚の歌詞カードから考えられることは、女性の場合、そのことばに含まれる意味をいかにして聞き手・読み手に伝えるか、という考えのもとで漢字の使い分けがされているのではないかと、ということである。漢字を変えることで特別な意味合いを持たせたりしているのではないだろうか。一方、男性は特に使い分けを行わないことから見ても、ここでは漢字を持つイメージの違いもあまりないように感じられる。歌手が女性で作詞者が男性でも、女性の気持ちをどう伝えるか考慮する人もいるが、たいていは使い分けがされることはない。その代わりにインパクトを持たせるためか、タイトルに「アウ」を使う場合のみ、漢字を変える傾向も見られた。こうしたことから見ても、女性はことばに対するイメージや、一つ一つのことばに意味の違いを持たせる傾向があると考えられる。

さらに、この調査結果から考えられることは、ことばが社会と密接な関係を持っているということである。演歌では内容的にも男女の恋愛ものが多く、男女の恋愛＝「逢瀬」というイメージが強いため、「逢う」という字が多用されているのだろう。また、演歌を主流として、60年代にはビ-

トルズの影響が日本中に広がり、ロックやフォークソングといったジャンルが増えている。あくまで推測であるが、当時の音楽というのは人々にとって心を癒したり、楽しむ存在であったのではないだろうか。つまり、「聴く」ためのものだった。そのため異字同訓の場合、両方の漢字を使うことはあっても、詩の内容によって使い分けをし、イメージを変えることはなかったのではないかと思うのである。カラオケが普及し始めたのが1977年頃⁷⁾である。カラオケの普及によって人々が歌詞により目を向けるようになったと考えられないだろうか。今、女性の「カリスマ的存在」とされている浜崎あゆみなどがいい例だろう。彼女の魅力として取りあげられる1つに「詞」がある。⁸⁾最近では「メロディーがいい」だけでなく「詞がいい」ことも曲やアーティストの人気の影響を与えているといってもよいだろう。だからこそ、最近の歌詞は使い分けが行われるようになったと思うのである。詞を音声として聴くだけでなく、映像として見ることによりイメージを膨らませ、自分なりの理解をする。社会の変化とともにことばもより多くの意味を持つようになったのである。ことばに多様な意味（ニュアンス）が持たれるようになった時代の中で、人々は漢字によってことばにどのようなイメージを抱いているのだろうか。意識調査によって確認したい。

2.3 学生対象の意識調査

3つ目の分析方法として、実際に漢字に対して持つイメージについて、18～22歳の金沢大学の学生127人を対象に意識調査を行い、傾向を調べてみた。この調査では「会う」と「逢う」、「寂しい」と「淋しい」、「怖い」と「怖い」で使われる漢字についてどのようなイメージをもっているか、使い分けをするならどのような時にどのようにするかということについて答えてもらったもの

である。⁹⁾

まず「アう」については、前述した性の違いとは異なり、男女ともに同じ意見が出ていた。「アう」では特定の人（好きな異性・久しくアっていない人など）に対して「逢う」が使われるというもので、「会う」のカテゴリーの中に「逢う」が存在しているのだと考えられているようである。また「逢う」のほう偶然で、ロマンチックなイメージがあり、「会う」は必然、一般的、事務的などといった意見が多かった。これはテレビや歌詞、「逢いびき」ということばによるイメージの影響だと考えられる。ドラマでも「めぐり逢い」などタイトルに「逢う」が使われることによって偶然性を強調していると感じられるし、「逢いびき」から「男女が人目をしのでアう」という、どちらにも恋愛が深く関わったところから受けるイメージが強いのだろう。また、テレビ番組のコーナーで、生き別れた家族との再会を望む人の心情を「～に逢いたい」と字幕で出していたり、新聞の番組欄で使われたりもしている。しかし、実際に久しくアっていない友人に手紙を書くとき、果たして「逢いたいね」と書く人がいったいどれほどいるだろう。恋人に対して書く人はおそらく多いだろう。しかし友人に対してこの字を使うのには抵抗があるのではないか。個人的には、恋人に対してでも気恥ずかしくなってしまうため、「会う」を使うか、あるいはひらがなにしよう。またイメージにしても「逢う」は異性（恋愛関係になる相手）との偶然の出あいに対して、恋人に対しては「会う」を使う、というイメージを持っている。それにもかかわらず「逢う」という漢字が使われているほうが素敵を感じるのなぜだろう。実際に使うことは少なくともテレビや音楽（詞）でなら受け入れられることば、そう考えると納得がいく。例えば、「愛してる」ということばが、ドラマや音楽で使われていても特に抵抗はないだろう。しかし、現実でドラマのよう

に人前と言えるだろうか。同じく自作の曲で「愛してる」と感情込めて人前で歌えるか。友達に「彼のこと愛してる？」と聞くことも、聞かれることもそうないだろう。使うとすれば「好き」ということばだ。年代や結婚しているかどうかによるかもしれないが、客観的に見るとロマンチックでも、実際に使うとなると少しためらってしまう。使えないからこそ逆に憧れるのかもしれない。タイトルに「逢う」の漢字を使うのは、「会う」よりもイメージが「恋愛」に結びつき、ドラマや音楽に興味を持つ人が多いためであるとも考えられる。

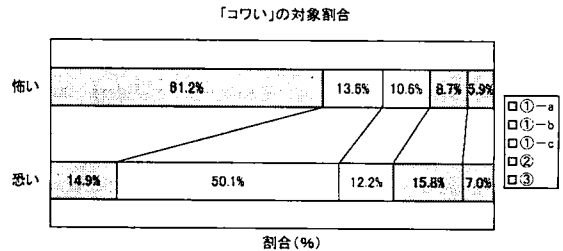
続いて「寂しい」と「淋しい」では、女性は「彼がいてくれなくて淋しい」などのように、「淋しい」は心情的（70.7%）、「寂しい」は外観的（68.6%）という意見が過半数を占めた。これには「静寂」ということばの影響もあると考えられる。また多くの人がWinkという歌手の「淋しい熱帯魚」という例をあげたところから見ても、聞き覚えのあることばによるイメージが強いことがわかる。さらにここでは「寂しい」のほうサビしさが強いということであった。また男性の場合、女性と同じ意見の人は約半分、残りの半分は逆に「寂しい」のほう心情的、と答えていた。さらに「淋しい」は子供っぽいイメージ、女性がよく使うイメージがある、とのことだった。この結果では男性と女性に関して、「サビしい」から受けるイメージが大きく異なっている。個人的には多くの女性が答えたように、「寂しい」は外観的、「淋しい」は心情的なもの、というイメージがある。具体的な例文として、「この町はどこか寂しげだ。」「あなたがいて淋しい。」などがある。微妙な違いであるが、外観的なものや一般的に感じるサビしさは「寂しい」になるのである。一方、恋人など特定の人がいってくれない時のサビしさは「淋しい」に当てはまる。以上のことから、男性は女性の心情について勘違いする可能性があるということになる。女性が男

性に対してサビしようにする様子は、男性には「誰でもいいからそばにいてほしい、寂しい様子」に見え、つまりは「一人ぼっちでかわいそう」に見えているということになるのだろう。しかし女性は「特定の相手に一緒にいてほしい」だけで、「誰でもいいわけではなく、あなたがいなから淋しい」のである。

さらに、「サビしい」「サミしい」という読み方についても統計を取ってみた。全体的に見ると、「寂しい」の読み方では「サビしい」が61.8%とやや多く、「淋しい」では「サビしい」が50.9%で「サミしい」が49.1%と、ほぼ同じ割合であった。性別で見ると女性のほうが別々の読み方をする傾向が見られた。また、「サビしい」という読みのほうが外観的で、「サミしい」は心情的、泣いているイメージがあるという意見も見られた。¹⁰⁾しかし、これらはあくまで傾向であるため、はっきりとしたイメージの違い、意識の違いというものが「アウ」の結果のように得られなかった。

最後に「怖い」と「怖い」であるが、次のように分類することにした。「コワイ」という対象が、①物であるもの、②事柄であるもの、③その他とし、①をさらに①-a 幽霊など、実体がないと考えられるもの、①-b 人など実体があるもの、①-c その他のもの、の計5つに分けた。この結果、「怖い」では77.2%が①、15.8%が②であると答え、さらに全体における割合で①-a が14.9%、①-b が50.1%であるということであった。また、「怖い」では85.4%が①で、8.7%が②と圧倒的に①が多く、その割合は①-a が61.2%で、①-b が13.6%であるという結果が得られた。調査ではそれぞれのことばを使って例文を書いてもらい、それ以外にイメージや使い分けを答えてもらったため、例文の説明として「精神面での恐怖とそれ以外」などという区別も多かった。また、説得力のある意見として「怖い」は「あついコワさ」、「怖い」は「寒いコワさ」、というものがあつた。

後者は身の毛がよだつ、という意味であるらしい。さらに、「コワさ」の度合いに関して「怖い」<「怖い」という意見が圧倒的に多かった。これらの結果をグラフに表すと以下ようになる。



3. 考察と展望

これまでの分析により、個々の漢字がもつ本来の意味と実際の使われ方、また、そのイメージを見ることができた。「アウ」の使い分けは推測したとおりであったが、「逢う」が以前から使われていたということは大きな発見であったと言えるだろう。さらに、歌詞カードでは「サビしい」ということばの使用頻度により、戦後間もない頃やアイドル全盛期の明るい時代など、時代背景が見て取れた。また、カラオケの普及という要因がことばの使い分けに関わっているとも言えるだろう。このようなことから、ことばが社会と密接に結びついていることが明らかとなった。

また、ことば、特に漢字に対するイメージの違いがあることから次のように考えられる。現代語の特徴として、カタカナ語が多いことがあげられる。以前は「とっくり」と呼ばれていた服の襟が「タートルネック」と言われるようになったり、「襟巻き」が「マフラー」になったり、カタカナ語、いわゆる外来語なしでは思うように話ができないほどになっている。これはカタカナ語の多くが英語からきており、日本人の外国への憧れ¹¹⁾から、「カタカナ=かっこいい」というイメージ

が成立しているためだろう。漢字でもカタカナでも、身近なことばはイメージによって使い分けられるようになったと言える。マスメディアの発達により、イメージが浸透しやすくなったためであろう。

しかしその一方で、イメージ優先で実際の意味と異なる、ということに対する意識がもたれるかどうかが問題となる。漢字の持つ意味についてイメージと照らし合わせるためにも、漢和辞典にある漢字の意味を国語辞典に併記するか、漢字のイメージと使い分けの用例を明記した辞典を編纂するなどして、国語教育の幅を広げてはどうだろうか。そうすれば、漢字を使い分けることで、伝えたい事柄に対する理解もより深まり、男女によることばのイメージでの誤解をなくすことにもつながるだろう。

4. おわりに

今回の調査では学生の協力があつたため、異字同訓語についてよりはっきりとした「イメージと使い分けの関係」を見ることができた。アンケート調査に協力してくれた学生に対し、この場を借りてお礼申し上げる。「アウ」に関しては、使い分けをしないまでも自分なりの理解をしている人が多く、それぞれの持つイメージを答えてくれた。しかし、「サビしい」と「コワイ」については、「使い分けたことがないし、わからない」という意見が多く、意識する機会がないことが明らかになった。

私自身、「恐い」「怖い」を区別することはできなかった。どう使い分けていいのか考えつかなかったし、実は考えたこともなかったのである。こういった異字同訓語を考えるにあたって思いついたことばで、言うなれば自分もわからないから人に聞いてみよう、調べてみよう、と思っていた

のである。今考えると『本当にあつた怖い話』というタイトルの本が出ているが、私の中で「こわい」ということばをイメージするとカタカナで「コワイ」とするのが一番びったりする。そのため、この結果で異なったイメージ・使い分けを知ることができ、とても参考となった。また、この調査でこういった疑問に興味を持ってくれ、「今まで気にならなかったが、言われてみて考えるようになった。本当のところを知りたい。」という声が出たことはとてもうれしいことである。

J-POPの歌詞カードではなるべく使い分けの傾向を調査したかったために同じ作詞者の詞を多く集めて統計をとった。これは、最近の詞は意図的にことばを使い分けているだろうと考えたからである。また、以前の調査¹²⁾では演歌や昭和のヒット曲などをまったく調べずに統計を取っていたが、今回異なる視点から統計を取ってみて、自分では予想もしなかったことが明らかになり、そのおかげで推測の幅も理解も広がったように感じる。まだ十分な調査と言えないかもしれないが、今までずっと気になっていたことばの意味が自分なりに理解できたし、使い分けの傾向も知ることができた。また、調査の幅を広げたことによって、時代や社会とのかかわりについても触れることができたと言えるだろう。

注 釈

- 1) 『新聞に見る日本語の大疑問』（東京書籍、1999）p.85、p.212参照。
- 2) 語源、へんやつくりなどの構成からくる意味のことをいう。『学研 漢和大字典』（学研、1985）p.4参照。
- 3) 日本独自の大衆的な歌曲、歌謡曲をいう。現代では歌謡曲とは演歌以外にも日本のポピュラー音楽全体をさす。『イミダス2000』（集

英社、2000) p.1229参照。なお、ここでは年代によって「詞」の内容が変化しないと考えたため、1950年以前のものから現代のものまでを集めた。

- 4) 90年代に入ってから、ロックやソウル&ヒップホップ系など、海外のポピュラー音楽から何らかの影響を受けている日本のポップス全般をさす。『現代用語の基礎知識2001』(自由国民社、2001) p.1211参照。
- 5) 演歌は日本独自の音楽であり、年代によってそれほど変化しないと考えたため、年代ごとのヒット曲としてではなく、演歌として分類した。また、ヒット曲の中から、演歌歌手であると分かるものは取り除き、判別できないものは調査の対象からはずして統計を取った。
- 6) Every Little Thing『出逢った頃のように』 MY LITTLE LOVER『めぐり逢う世界』(アルバム『evergreen』より)。
- 7) 『イミダス2000』(集英社、2000) p.1229参照。
- 8) 2001年1月22日(月)付 朝日新聞(大阪本社版)「歌詞に魅かれて」の記事参照。
- 9) 意識調査票は論文末に資料として添付してある。
- 10) 「ビ」は口唇破裂音(閉鎖音)で、外に出すため強い感じがするのに対し、「ミ」は鼻音で鼻にぬくため、内にこもりやさしい感じを受けることと関係があると考えられる。
- 11) 『日本人はなぜ英語ができないか』(岩波新書、1999) p.7、p.185参照。
- 12) 2000年1月に同テーマで行った調査。国語辞典、J-POPの歌詞カード、意識調査のみを使用した。

参 考 文 献 (50音順)

- ・ 青木信雄他編『現代用語の基礎知識2001』(自由国民社、2001)
- ・ 天竺勇史他編『イミダス2000』(集英社、2000)
- ・ 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明監修『日本語大辞典』(講談社、1989)
- ・ 金田一春彦・林大・柴田武編『日本語百科大事典 縮刷版』(大修館書店、1995、1988)
- ・ 鈴木孝夫著『日本人はなぜ英語ができないか』(岩波新書、1999)
- ・ 藤堂明保編『学研 漢和大字典』(学研、1985)
- ・ マイクロソフト版『Bookshelf Basic』(マイクロソフト/小学館、1998)
- ・ 毎日新聞校閲部編『新聞に見る日本語の代疑問』(東京書籍、1999)

参 考 資 料 (50音順)

- ・ 安室奈美恵『181920』(1997)
- ・ Every Little Thing『everlasting』(1997)
- ・ Every Little Thing『Time to Destination』(1998)
- ・ 華原朋美『LOVE BRACE』(1996)
- ・ 華原朋美『storytelling』(1997)
- ・ GLAY『BELOVED』(1996)
- ・ GLAY『BEAT out!』(1996)
- ・ GLAY『pure soul』(1998)
- ・ GLAY『HEAVY GAUGE』(1999)
- ・ Globe『CRUISE RECORD 1995-2000』(2000)
- ・ 梧桐書院編集部編『思い出のヒット曲500』(梧桐書院、1998)
- ・ 梧桐書院編集部編『昭和のなつメロ415』

(梧桐書院、2000)

- ・ ZARD 『ZARD BEST ~ request Memorial ~』 (1999)
- ・ ZARD 『永遠』 (1999)
- ・ SILVA 『HONEY FLASH』 (1999)
- ・ SPEED 『MOMENT』 (1998)
- ・ Dreams Come True 『THE SOUL』 (2000)
- ・ 野ばら社編集部・椎葉京一編 『日本のうた 第5集』 (野ばら社、1998)
- ・ 浜崎あゆみ 『LOVEappears』 (1999)
- ・ B'z 『B'z The Best Treasure』 (1998)
- ・ B'z 『B'z The "Mixture"』 (1999)
- ・ 堀野羽津子編 『特選演歌』 (成美堂出版、2000)
- ・ MY LITTLE LOVER 『evergreen』 (1995)
- ・ Mr. Children 『Kind of Love』 (1992)
- ・ Mr. Children 『Everything』 (1992)
- ・ Mr. Children 『Atomic Heart』 (1994)
- ・ Mr. Children 『深海』 (1996)
- ・ Mr. Children 『BOLERO』 (1997)
- ・ Mr. Children 『DISCOVERY』 (1999)
- ・ Mr. Children 『Q』 (2000)
- ・ L'Arc ~ en ~ Ciel 『True』 (1996)
- ・ L'Arc ~ en ~ Ciel 『ark』 (1999)
- ・ L'Arc ~ en ~ Ciel 『ray』 (1999)

[資 料]

漢字におけるイメージの違いの意識調査

以下の分類した2つのことばは同じ意味合いをもったものです。それぞれの漢字を使って一文を作ってください。（ただし漢字は訓読みで使用する。送り仮名は変えてもかまいません。）

また、それぞれの漢字に対して持つイメージや、どのように使い分けするかを具体的に書いてください。なお、「寂しい」「淋しい」に関しては読みがなをふって下さい。ご協力お願いします。

1. ①「逢う」

②「会う」

2. ①「寂しい」

②「淋しい」

3. ①「恐い」

「怖い」

私は怖い動物が好きです。

私は怖い動物が好きです。私は怖い動物が好きです。私は怖い動物が好きです。

②「怖い」

私は怖い動物が好きです。私は怖い動物が好きです。私は怖い動物が好きです。

4. ①「極める」

「極める」

②「究める」

「究める」

歳 男・女

ありがとうございました